

## 一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

### 1. まえがき

東日本大震災の復旧や対策が遅々として進まず、結果としていえることは、どうも今回の災害は想定外という自然災害より、人災という気がしてならなくなった。

そこで「悉有仏性と自然災害」で、人間として大自然に対し謙虚で畏敬の心を忘れ傲慢でなかったのかを考え、「原発事故と不退転を学ぶ」で、事故の情報を公開し、逃げるのではなく十二分の対策を講じ対応する姿勢、不退転の決意でのぞみ、「本末転倒の情報管理」で、正確無比の情報の提供をし、情報の本末転倒で国民が右往左往することのないことを徹底してほしいことを述べてみた。

徳川幕府の300年の安泰は、数多い仏教の宗派や寺院の勝手な動に対して、宗派ごとに本山→本寺→中本寺→直末寺→孫末寺という上下関係の厳然とした従属関係で統一させ、バラバラの関係をなくしたのである。

政治の世界の「政党」という言葉は「共通の原理、政策をもち、一定の政治理念実現のために、政治権力への参与を目的に結ばれた団体」といわれている。

にもかかわらず、政党の仲間どうしでお互いに誹謗中傷で一枚岩でない気がしてならない。

これでは、東日本大震災の終息はおろか、原子力発電所の事故の終息、いわんや原発事故の発電所の所在地の周辺の方々の自宅への帰宅はなかなか解決しそうにもない。実に残念でならない。困ったものである。

それは、原子力発電事故に対し、科学者だ、技術者だといっている時代ではなく科学技術の時代であり、各々の協力以外に解決策はない。早急に汚染水の対策を講じることも忘れてはならず電気技術者として、各分野の関係者の尚一層の御協力をお願いしたい。

著者：広島大学生物生産学部講師  
元近畿大学産業理工学部客員教授  
日本禅画家協会名誉理事  
中国少林書画院名誉教授  
法号位 法印 禅画位 奥伝  
青木伸雄  
釋 禳 禪 (野風生)  
雅号 樹泉

### 2. 悉有<sup>しゅうぶつしょう</sup>仏性と自然災害

「悉有仏性」とは、宇宙世界に存在するあらゆる物質に、仏性、いわゆる仏としての本性、如来蔵が存在するという、大宇宙、自然界に対し、おかしがたい尊厳と畏敬の心を持って接するという考え方である。

今回の東日本大震災という、未曾有の大自然災害を考え思うとき、我々は、人間として敬虔な畏敬の心を忘れ、傲慢ではなかったかと反省すべきだと考えるべきだと思考する。

「山川草木悉有仏性」、心がないと思われる山や川や草や木にも皆んな仏性があると考えた時、今回の大自然災害は、自然の偉大さを考えさせる教訓として考えなおす必要があると考える。

例えば、津波と地震という点で考えると、我々は、三陸海岸の大津波を、明治二十九年(1896年)、昭和八年(1933年)の地震後に地震津波として経験。さらに昭和三十五年(1960年)に南米チリの大地震による大津波を経験、これはチリ地震による津波が、日本の大平洋沿岸には来襲するとは考えられず気象庁は津波警報も発令しなかった。日本で地震がなかったからである。想定外の津波が又も三陸海岸全域を襲ったのであるが、文献によると天正十四年(1586年)ペルーのリマ沖の大地震、慶安四年(1651年)ペルー、チリ地震、貞享四年(1687年)ペルーのキャラオ地震、享保十五年(1730年)チリのコンセプション津波、宝暦元年(1751年)チリのコンセプション津波、天明年間(1781年~1789年)メキシコに津波、天保八年(1837

